

論文審査の結果の要旨

氏名：尾 形 大

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：伊藤整における「心理小説」の形成とその転回に関する研究

——第一詩集『雪明りの路』から『得能五郎の生活と意見』（1926-1941）を中心に——

審査委員：（主査） 教授 紅 野 謙 介

（副査） 教授 久 米 依 子

教授 高 榮 蘭

慶應義塾大学教授 小 平 麻衣子

伊藤整は、日本近代文学において詩人・小説家・批評家・エッセイストとして活躍するとともに、英文学の翻訳家としても知られる作家である。第一詩集『雪明りの路』によってデビューし、1920年代半ばの抒情詩人として注目されるが、東京の文壇に登場してからは、プルーストやジョイスなど、ヨーロッパ現代文学の紹介者・翻訳者へと転じ、昭和初期のモダニズム文学の旗手となった。しかし、小説家としては満足いく作品を生み出すのに苦闘することになる。やがて『得能五郎の生活と意見』など、戯作的な語りによる批評性の強い小説で個性を打ち出し、戦後は批評家としても大活躍。『チャタレイ夫人の恋人』の翻訳で発売禁止処分を受け、猥褻図書をめぐる裁判闘争を展開する一方、その裁判の過程を描いた『裁判』や『伊藤整氏の生活と意見』を著す一方、『女性に関する十二章』が当時の人気ベストセラーとなった。以後、『汎濫』『変容』などの長篇小説のほか、日本の近代文学や文化・思想について多くの批評をくりだした。なかでも『日本文壇史』は、近代文学研究にも大きな影響を与え、高い評価を受けている。

こうした伊藤整を研究対象とする尾形大氏の学位請求論文は、詩人デビューからモダニズム文学への転身、そして諷刺と戯作精神に満ちた批評小説にいたる初期伊藤整の作家的確立を論じたものである。全4部・11章から成り、それぞれは第1部「抒情詩人としての出発」、第2部「新心理主義と『心理小説』の形成」、第3部「新心理主義の模索と応用」、第4部「新心理主義からの脱出と転回」と名づけられている。この見出しからも分かるとおり、詩から小説への転身と、新心理主義文学の提唱と模索、苦闘の末の転回といった、初期伊藤整の葛藤が時系列に即すかたちで跡付けられている。

審査のなかで議論を呼んだのは、この学位請求論文が総体として、現在の日本近現代文学研究の理論的水準において、どの程度、抜きんでているか、新しい研究の地平を切り開いているかをめぐってであった。全部で11本の論文のうち、第3章にあたる『『新しい心理小説』をめぐるプルースト文学受容の実態——短編小説『アカシアの匂に就て』における心理描写の方法』は、日本文学協会の発行する学会誌『日本文学』に掲載された。第4章「翻訳家・伊藤整と1930年代——第一書房版『ユリシイズ』翻訳を軸として」は、東京大学国語国文学会の機関誌『国語と国文学』に発表されている。また、第9章の『『得能五郎の生活と意見』における「余談」的方法の内実——自己批評的『風刺』の構造と自己戯画化の獲得』は、昭和文学会の学会誌『昭和文学研究』に掲載されている。いずれも、公的に認められた日本近現代文学研究に関わる学会誌であり、それぞれに専門家による査読の結果を受けて採択された論文である。したがって、学界的な水準においては、すでにこれらの論文は一定以上の評価を得ていると言っても過言ではない。

その上でなお、この論文が日本近現代文学研究の直面しているさまざまな問題や方法的な隘路に向きあい、多くの研究者に示唆を与えるものになっているかどうか。そのように問うならば、まだ充分とはいえない。既存の文学研究の内のりのなかで研究の言葉が積みあげられている。そこが物足りないというのが審査委員の共通する認識であった。

たとえば、申請者は序章で、伊藤整本人や瀬沼茂樹といった作家・批評家による回想的な自己言及をそのまま信用することなく、いったん保留の態度をとる。「心理小説」といった用語の使い方一つをとってみても、果たして日本の近代文学の歩みは「心理小説」の展開過程だと言えるのかどうか。「新心理主義」といったとき、「新」の前に、どれほどの「心理主義」文学が成立していたのか。こうした興味深い留保と慎

重さを申請者は示すのだが、その直後には「心理小説」ではないものの、伊藤整以前の日本近代文学には「心情」を中心に描いた「心情小説」があったと述べてしまう。逆にこれによって定義の曖昧な造語を繰り出したのであって、せつかくの構築主義的な歴史への見直しが生かされていない。

詩から小説へのジャンルの転換も、東京の文壇への進出と、抒情詩の時代が終わっているなかで、より「新しさ」への希求から小説へと転じたかのように、外在的な文脈によって語られている。たしかに伊藤整は置かれた環境と主体の相互関係に敏感な作家であり、そのかぎりにおいて一種の自己卓越化を演じようとして小説ジャンルへ飛び込んだと言えなくもない。だからこそ、モダニズム文学に傾斜し、反対に小説として満足のいく作品を生み出せないという苦闘を強いられたのではないかと評してもいいだろう。しかし、申請者はそうした皮肉なまなざしを向けるのではなく、あくまでも伊藤整に寄り添い、その代弁をするかのように作家としての歩みをレポートするのにとどまっている。翻訳論にしても同じように、現在の文学研究において「翻訳」とはきわめて用心深く扱わなければならない重要な鍵概念であるにもかかわらず、申請者はきわめて素朴な意味で伊藤による「翻訳」の適否をとらえている。このように本論文は、文学研究が直面している重要なトピックや方法にかぎりなく接近しながらも、それを活かしきれていないという弱点を有している。

しかし、審査委員たちの要求をいったん脇において、現在の学界のなかでこの論文を置き直したならば、少なくとも標準的なレベルを優に超えていることは認めなければならないだろう。

具体的にあげるならば、先にふれたように「心情小説」という概念はたしかに曖昧ではあるが、「心理小説」という名称自体が1920年代以降、遡って適用され、あたかも実体あるものであるかのように歴史が構築されたという指摘は、問題提起として十分に評価されるべきだろう。第1章、第2章を通じて、詩人から小説家へと転じていく伊藤の変化を、微視的に追究し、1つ1つの発言や詩作への分析を丹念に辿り直している。その作家的な歩みに対する丁寧なアプローチは文学研究に不可欠なものでもある。個々の雑誌や著作について実証的な調査はこの申請者の得意とするところであり、そうした資料調査と発掘が個々の論文のなかで光を投じている。

また、第3章では、伊藤の短編「錯覚のある配列」や「アカシアの匂に就て」が、これまで論じられてきたようにプルーストの『失われた時を求めて』の「スワン家の方へ」から「感化」を受けたのではなく、伊藤が入手した雑誌『Criterion』(1924.07)掲載の英訳版『The Death of Albertine』からの直接的な影響によるものであり、伊藤のプルースト受容も『失われた時を求めて』全体というより、『The Death of Albertine』に限定されることを、説得力あるかたちで解き明かしている。こうした指摘はただ実証研究ということにとどまらず、今後の研究への新たな可能性を開いている。第6章の「文章論」についての考察においても、厚生閣書店の『日本現代文章講座』(1934.04-11)への参加を通じて、伊藤が「新しい文章論」への関心を深め、文学の基盤を作り直していく過程を分析している。こうした成果は作家論的な研究のなかに収まるものであり、かつまた、その調査対象もさらにもっと拡大し、掘り下げていってほしくはあるけれども、やはり一定の評価を与えるべきだと考える。

第9章は、『得能五郎の生活と意見』という初期伊藤整の達成点となる小説を対象に、戦時下の厳しい言論状況のなかで、文学がなした表現を探っている。風刺が批評的な強さをもってしまうとたちまち弾圧されてしまうなかで、饒舌や脱線、はぐらかしといった「余談」的な方法を通して、伊藤は屈折した風刺の表現を切り開いた。なかでも、従来は「戯作」性として指摘されていた表現上の特色を、ゴーゴリの『死せる魂』や中野重治の『空想家とシナリオ』との関連にもふれ、同時代の文学言説との関係において分析したことに成果を見出すことができる。こうした論点は、坂口安吾や織田作之助、太宰治などにも広く見える傾向であり、そうであるがゆえに、当時の文学の一部に現れた風刺的な表現が文学者同士でどのように共有されていたのかが気になってくる。また限られたものだけの閉じた共有では政治性をもたない。風刺とはその意図がより広く伝わらないかぎり批評的効果はない。しかし、明確に伝わりすぎたときには国家が介入してくる。この困難な課題にそれぞれはどのように向きあったのか。申請者が追究する「創作の現場」はこうした問いにも答えるものでなければならない。少なくとも申請者は、根源的な問いの入り口に立っている。

現在、かつての人気作家伊藤整のテキストは、詩も小説も、そしてその批評文もなかなか読み返されることがなくなっている。しかし、にもかかわらず、伊藤整という作家は、批評家として平野謙とともに日本近現代文学をとらえる認識論的な枠組みを作り上げたことにおいて、日本文学研究にとって重要な研究対象である。伊藤整というプリズムを通して、わたしたちは日本近現代文学研究をとらえがちである。だ

からこそ、伊藤整の表現や認識がとらえ返されなければならない。申請論文の範囲を超えることになるけれども、戦後のチャタレイ事件とその渦中の伊藤の対応を通して、刑法 175 条をめぐる猥褻文書をめぐり裁判闘争を考えることもできる。同じ 1950 年代には、女性を話題の中心に置いて男性による女性論をくりひろげ、かつその女性読者を多く獲得するというパフォーマンスを展開した。戦後ジャーナリズムの変容と読者の拡大、ジェンダー・バイアスを考える際に、伊藤整は絶妙な材料を提供するだろう。言語芸術としての前衛的な文学論を闘わせるかと思えば、同時に巧みな「文壇遊泳術」をくりひろげても見せた。

伊藤整という対象は、かくして今後もまだまだ考察の余地のたくさんある文学リソースだと言っているだろう。申請論文はそうした大きな資源の山に登攀する道筋を示した。その最初の案内者としての意義は大きい。

よって本論文は、博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 年 月 日